

らっぱの  
喇叭呑み

高 13 回 矢頭國明

だれ よ おれ おおざけの うわばみ  
誰が呼んだか 俺のこと 大酒飲みの 蟒 なんて

きこ いろり そば むり  
どてら着込んで 囲炉裏の傍で 一日飲んでりや 無理もない

ぐち く あか がお  
愚痴と悔やみを 火にくべて 酒で焼けたか 赤ら顔

いっしょうびん いっきかせい らっぱの  
一升瓶を抱き抱え 一気呵成の 喇叭呑み

ふぶ かじか  
外は朝から 吹雪いてる 悴む指を 温めながら

せがれ おれ もつ ほぐ  
凍りついてた 悴と俺の 纏れた昔を 解したい

いろり あぶ  
囲炉裏挟んで 差し向かい 男同士の焙り酒

いっしょうびん な か ばん らっぱの  
一升瓶を 撫でながら 代わり番この 喇叭呑み

むね はる のどか  
胸のしこりが 解けた春 長閑な時が 流れる日々も

おれ がら は  
俺の心は 止まったままで 抜け殻みたいで 張りもなく

ぐち く ぎやくもど す  
愚痴と悔やみが 逆戻り 拗ねて笑うか 赤ら顔

いっしょうびん らっぱの  
一升瓶が 泣いている 俺の一生 喇叭呑み

(折鶴会だより 27号 16頁「折鶴文芸」 - 『作詞』 全詞掲載)